

## その向こうにある徒然の日々に 思いを馳せて

救急医学教室 教授 / 救命救急センター長

高須 朗

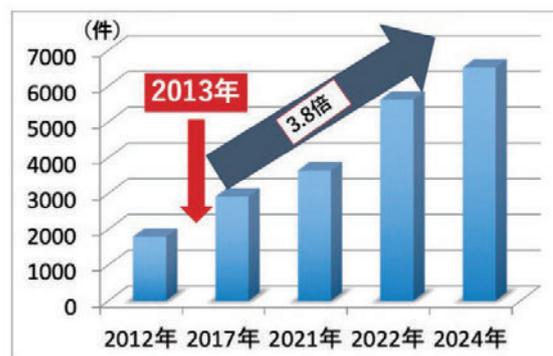


9月初めの頃だったか、学務の方から来年3月の最終講義の予定調整について連絡があり「え!もう定年退職が迫って来ているのか」と少し驚いた。定年退職はパソコンの操作で言えばプログラム進行中の「強制終了」のようなもので、こちらの意思に関係なく「もう辞めてください」と言われるようなものだが、ちょっと待てよ。これはパソコンのフリーズのごとく何の前触れなく突然に降りかかるものでなく、予めわかっているイベントで「プログラム終了」というより「ミッション終了」と言うべきものか。そう言えば自分としても「やり遂げた」という禅でいうところの「廓然無聖」という境地、清々しい思いすらあるもの事実である。しかし、本当にそうなのか。最近、論文をあまり読まなくなったり、新しい研究テーマにも着手しなくなってきた。この状況は「向上心の衰退」というより、単に「色々なことが面倒になってきた」というのが実情で「廓然無聖」に程遠い一種の老化現象なのかも知れない。なるほどこのままでは「老害」と揶揄される公算が大きい。ならば「もうそろそろ辞めてください」と平和的に「強制終了」とするこの制度は、組織運営の恒常性維持のため都合なシステムであると妙に納得している。

本学に2013(平成25)年に舞い戻ってから13年経った。「舞い戻った」というのは、本学が母校であるということである。「救急医学を極

めたい」と血気盛んに飛び出し、関西圏内で7年間、その後関東の某医科大学に20年間、どっぷりと「救急」に浸かりそれなりに充実した毎日で、関東の地に骨を埋めるつもりであった。そこに母校である本学に赴任する話が降って湧き、損得勘定を抜きにして血の騒ぐままに帰って来た。ところがその現実には身を晒して暫し放心状態となった。しかし「兎に角、走らねば」とがむしゃらになった。気がつけば救急車受け入れ(搬送)件数は約4倍(図1)、たった4人の医局員は20人を超えるようになった。これらのアウトカムはとりあえず自画自賛して良いかも知れないが「その舞い戻りはこれらアウトカムに関係しない」という帰無仮説は本当に否定されるのだろうか。「救急を受けなければ、そして救急患者を救いたい」という気運、これは全学的なもので、つまり法人執行部、看護部、事務、そして各診療科、何よりも教室医局員の熱意なくしては達成できなかったとしみじみ思うところで、

図1：救急車受け入れ件数



ならば救急車受け入れ件数が増加した2013（平成25）年のポイント(図1 矢印)は、たまたまのタイミングで上記の帰無仮説はやはり否定されずに「偶然のイベント」とほぼ結論されるだろう。

ミスチルのヒット曲の歌詞に「手に入れたものと引き換えにして、切り捨てたいくつもの輝き、いちいち憂いでいるほど平和な世の中じゃない」という一節があるが、聴く度にその軽快なメロディーと裏腹に神秘的な気持ちになる。作詞の桜井さんの真意は不明だが、世の中の全て事象は楽と苦、陽と陰、光と影、作用と反作用など、表裏一体、つまり不可分な関係で成り立っていると思う。自分はこの仕事でいろいろなものを

手に入れてきた。子曰く、「之を知る者は之を好む者に如かず、之を好む者は之を楽しむ者に如かず」。この仕事を「知り」「好み」そしてほんの少しだが「楽しむ」までできたかと思う。その一方で「仕事優先」と土日関係なく飛び出して何日も帰らない日々も幾多、予定キャンセルは星の数ほどあり、家族、特に妻にはかなり無理を強いてきた。今の自分があるのは妻の支援があったからで、今更ながら感謝の気持ちで一杯である。

さて、定年退職後どうするか。ありがたい事に再就職のお話もなくは無い。しかし、ここは「切り捨てた輝きを探しに行こう」と言えばすぐカッコいいが、春風駘蕩、のんびりと過ぎて行くこの先の徒然なる日々思い馳せている。



医局員との集合写真